

植物

ア 種子植物

兵庫県では約 2,500 種の種子植物の分布が確認されていて、種子植物相には、但馬・丹波・播磨・阪神・淡路の 5 地域に特有の気候条件・地理条件に対応した特徴がみられます。

但馬地域は、最高峰の氷ノ山をはじめとして扇ノ山、三川山、妙見山、瀬川山など高い山が多く、多雪環境で、ブナを中心としてミズナラ、ハウチワカエデ、シナノキなどより構成される冷温帯林が分布しています。但馬地域で特に注目すべきは、林床にオオカニコウモリ、ヒメモチ、チョウジギクやクロバナヒキオコシなどの典型的な日本海要素の植物群がみられることです。また、ミツガシワ、ミズバショウなど北方系の遺存植物とされるものが残されていることも特徴の一つです。

丹波地域には、自然林の植物は少ないですが人里近くの山の端にセツブンソウやユキワリイチゲ、キバナノアマナ、レンブクソウなど早春の植物がよく残っています。

東播磨の丘陵地や低地は全国でも有数のため池地帯で、オニバス、ガガブタ、アサザ、ミクリ類など多くの水生植物があり、ため池の周辺の貧栄養湿原にはミミカキグサ類、モウセンゴケ類、サギソウ・トキソウなどのラン科植物といった典型的な湿原植物がみられます。西播磨には、コヤスノキ、チトセカズラ、ナツアサドリといった全国でも兵庫から岡山、広島、山口県の一部の地域にしか生育していない種がみられるのが特徴です。

また、西播磨から東播磨の丘陵地の乾燥した岩石地にはツチグリ、フナバラソウ、キキョウなどの満鮮要素（中国東北部・朝鮮から日本列島に分布を広げたと考えられている植物群）の草原生植物が豊富にみられているのが特徴です。変斑れい岩地域に生えるオチフジは地球上で西播磨と和歌山県にしか見られません。

阪神地区の六甲山周辺にもオキナグサ、クサフジ、オオヒキヨモギ、コウリンカなどが多くみられます。これらは日当たりのよい乾いた草原に生育する植物であり、六甲山周辺によく残っているのは、瀬戸内の乾燥気候によって草原生植物の生育空間が存在したこととカヤ場としてススキ草原を草刈や火入れによって草原として維持してきたからと考えられます。このように兵庫県の植物相を考えるうえで、多様な植物種の維持に果たした人為的要因はたいへん重要です。また、アリマグミは阪神地域が分布の西限域になります。

阪神地区から相生・赤穂に至る瀬戸内沿岸の地域には、シイ・カシ類など暖温帯生植物からなる照葉樹林がよく発達し、神戸市西区の太山寺や、赤穂市生島などにはとくに優れた照葉樹林が成立しており、イスノキ、コジイ、モチノキ、アラカシ、ヤブニッケイ、ヤブツバキなどがみられます。

淡路島南部は暖流の影響によりさらに暖温帯生植物が多く、ヤナギイチゴ、ホルトノキ、ヤマビワ、カンザブロウノキ、ミミズバイなど県内では珍しい植物がみられます。淡路島南部にはこのほかにヒメシヤラ、トサノミツバツツジ、オンツツジなど四国や紀伊半島と共通に分布する種がみられることが特徴です。

兵庫県にはこのほか、隣接府県をふくむ狭い範囲のみに分布する種や、隔離分布している種があります。例えば、オオマルバコンロンソウ（岡山県・京都府）、カミガモソウ（京都府・三重県・長崎県・鹿児島県）、オチフジ（和歌山県）、タジマタムラソウ（島根県・鳥取県・京都府）、ヤブレガサモドキ（愛媛県・高知県）などであり、これらは兵庫県の植物相を特徴づける植物種の一つといえます。

イ シダ植物

日本で確認されている 630 種のうち、兵庫県には変種を含めて 251 種が分布しています。冷温帯から暖温帯をもつ本県の気候を反映して、北方系の種も南方系の種もあり、ヘイケイヌワラビ、ミヤマシシガシラは近畿では本県のみ分布する種となっています。

南方系の種では、タニイヌワラビ、ウラボシノコギリシダなどが夏の乾燥の影響で瀬戸内側での分布を欠くものの、対馬暖流の影響で冬も比較的温暖な日本海側にも分布します。

丹波地方のチャート層などの堅い岩盤の急峻な地形では、カミガモシダ、シシラン、ヌリトラノオなどのシダ類が特徴的に分布します。兵庫県レッドデータブック 2003(*)には 93 種が掲載されており、A ランクの 44 種のなかにはキヨスミコケシノブ、イッポンワラビ、クラガリシダなど近年の現状が全く不明な種がある一方で、ヒメムカゴシダなどが新たに見つかったものもあります。

よく管理された湿潤なスギ林や里山にはイノデ類、イヌワラビ類が豊産しており、ハリマイノデ、フナコシイノデ、ルリデライヌワラビなどは本県を基準産地(植物を新種として記載したとき、その元になった標本を基準標本といい、その基準標本を採集した場所を基準産地という)とするシダ類として発見されました。

しかし、近年はシカによる食害が原因で減少しており、特に丹波・西播磨ではその減少は急激です。シカの食害があると考えられる林縁や林床に分布するシダ植物はイワヒメワラビ、コバノイシカグマ、オオバノイノモトソウなどが大部分で、極めて単調なシダ群落を形成するところが多くなっています。

都市部、特に六甲山地の南麓では、国内外来種と考えられる南方系のホウライシダ、イヌケホシダが目立ちます。特にイヌケホシダの増加が著しく、モエジマシダも数カ所で見つかり、都市の温暖化の反映と考えられています。ため池では農業利用由来の外来オオアカウキクサ類が東播磨や淡路で特に目立ってきており、在来の水生生物への影響が懸念されています。

ウ 蘚苔類(*)

兵庫県には石灰岩露頭がほとんどないために、日本の蘚苔類相を特徴づける要素の一つである石灰岩に固有な蘚苔類がほとんど分布していない点が特徴です。その一方で、県内各地で暖温帯林や冷温帯林、谷筋の渓谷林、あるいは高層・低層湿原など、県内各地に自然度の高い多種多様な生育環境が残されており、それぞれの環境に適応した種が分布して豊かな蘚苔類植物相をなしていることがわかりつつあります。

しかしながら、本県の面積が広いことと相まって、依然として調査の行き届かない地域が多数残されており、維管束植物(*)と比較した場合、県内の蘚苔類種多様性が十分に明らかにされたとはいえない状況です。今後重点的に調査すべき地域・事項としては、(1)自然度の高い環境(例：氷ノ山から鉢伏山にかけての地域)、(2)特殊な環境の場所(例：甲山山麓の湿原群や船越山の風穴、篠山市小金が岳岩稜部など)、(3)里山環境などがあげられます。特に里山環境についてはこれまで見過ごされてきましたが、近年、三田市藍本にある水田脇の小湿原から、近畿では産地が限定されるウロコゼニゴケ(ウロコゼニゴケ科・苔類)や近畿地方で唯一の産地となるハヤマヤナギゴケ(ヤナギゴケ科・蘚類)が見つかり、今後の調査によってさらに多数の希少種の発見が想定されます。

エ 淡水藻類

淡水藻類の多くは微小であるために顕微鏡を用いなければ観察できないため、すべての分類群を網羅することは難しく、藻体が肉眼で

容易に確認される分類群を淡水藻類の多様性を知る手がかりとせざるを得ないことから、ここでは紅藻類(*)と車軸藻類(*)を例に、兵庫県における分布の概要を示します。

紅藻類では、絶滅危惧 II 類のオオイシソウとチスジノリのほか、絶滅危惧 I 類の 1 種を含むカワモズク類 5 種が本県に分布します。

上郡町の安室川は九州以外でチスジノリが生育する数少ない河川の一つで、地元の中学生を中心にして、本種を指標とした河川の生物多様性の保全活動が展開されています。

一方、県内に基準産地がある日本固有種のユタカカワモズクについては、圃場整備による環境改変で絶滅した可能性が極めて高いです。これらの紅藻類の分布やその多様性は、湧水が存在する水域の環境特性と密接な関係があります。

車軸藻類は環境省レッドデータブック(*)に多数の種がリストアップされていて、本県では、絶滅危惧 II 類のシャジクモが水田やため池に広く分布します。県内における本種の生育は良好で、全国各地の状況と比べて分布域は広いと思われます。フラスコモ属については、環境省レッドデータブックで絶滅危惧 I 類にリストアップされた 42 種のうち 11 種が分布します。

全国的には車軸藻類は湖沼からの報告が多いのに対して、本県では湧水を利用した農業用水路にもしばしば生育します。車軸藻類については県内での分布調査がまだ十分とはいえない状況ですが、本県が全国一のため池数を有することから、車軸藻類の生育地や分布する種数は、今後の調査によりさらに増加すると考えられます。